

## 『金光明經』「正論品」と『宝行王正論』の比較

日野 慧 運

## 1. 問題の所在

中期大乘經典『金光明經』（4世紀成立）中の「正論品」（*Skt.* Ch.12 “devendrasamayam nāma rājasāstra parivarta,” *Tib1* Ch.12 “rgyal po'i bstan bchos lha'i dbang po'i dam tshig ces bya ba'i leu,” *Ch1* 「正論品」第十一, *Ch3* 「王法正論品」第二十）については、金岡 [1957] [1980: 100–117]<sup>1)</sup> による詳細な解説が知られている。その要点は、「正論品」には漢訳のみに権威付けのための改竄がある、バラモン教的帝王神権観と仏教的業観念が並存している、菩薩の精神に基づく正法治国を勧める内容である、と要約できよう。本稿はこれらについて、「正論品」と龍樹 (ca.150–250) 造『宝行王正論』との比較等を通じて、若干の再検討を試みるものである。

## 2. 「正論品」概観

「正論品」の内容は各伝本に増広ないし欠落があって一様でないが、いま便宜的に、全伝本の内容を羅列して分科すれば、以下の通りである。

## 【正論品内容概観・諸伝本内容対照表】

§0. 帰敬偈

§1. 地神が釈尊に王の論書を問う。

§2. 釈尊が地神に過去話を説き明かす。

§3. 力尊幢王が新王に即位した子の妙幢に語った。

§4. 自身も父王から授かった「正論」を汝に授ける、と。

§5. 力尊幢は「正論」本文を述べた。

§6. (1–2偈) 力尊幢の語り出し

§7. (3–6偈) 諸天王の集会にて四天王が梵天に、人王を天子とよぶ理由を問う。

§8. (7–12偈) 梵天が答える、王は諸天の加護により誕生するから天子という、と。

- §9. (13-16偈) 王は国民に善業を行わせ悪業を遮止せねばならない.
- §10. (17-18偈) 王が悪事を見逃せば①, その国には災いが生じる.
- §11. (17-24偈) 王が悪事を見逃せば②, 諸天は怒り, 敵の襲来, 凶事, 日月星宿の不順行, 天災, 飢饉が生じて国は滅びる.
- §12. (25-50偈) 王が悪事を見逃せば③, 諸天は語りあう, 「王が非法であれば, 諸天は怒り, 敵の襲来や内紛争乱, 日月星宿の不順行, 天災が起こり, 王族廷臣, 軍馬軍象は死に, 国民は非法に染まり, 正法が失われ, 飢饉・落雷・疫病が起こり, 凶作になり, 人々は楽しみなく, 力なく, 病むだろう」と. 王が非法であれば諸天の加護も無益である. 人は善業により生天し悪業によって三悪趣に墮す.
- §13. (51-63偈) 王が悪事を見逃せば④, 悪業は三十三天をも焼く, 王は諸天にとって罪人となり子と認められない. 王は命や王位を捨てても, 国民の悪業を遮止し, 正法をもって国を守り, 公平無私であるべきである.
- §14. (64偈-73偈) 正法に適う王を諸天は喜び, 国土は日月星宿の順行, 好天, 豊作に恵まれる. 王は正法をもって国を守り, 国民の悪業を遮止せねばならない.

## §15. 聴衆は歡喜信受する

§	Ch.1	Sk.	Tib.1	Tib.2	Ch.3
0	—	131.10-132.2	103.3-14	—	—
1	—	—	—	308.1-13	442a15-22
2	346c24	—	—	308.14-15	442a23-24
3	346c24-26	132.4-5	103.15-17	308.16-19	442a24-26
4	346c26-347a2	132.6-11	103.18-25	103.19-ff. (=Tib.1)	442a26-b3
5	347a2-3	132.12-14	103.25-104.4	= Tib.1	442b3-4
6	347a4-6	133.1-4	104.5-12		442b5-8
7	347a6-12	133.5-12	104.13-28		442b9-16
8	347a12-21	134.1-135.3	104.29-105.22		442b17-28
9	347a21-27	135.4-136.6	105.23-106.8		442b29-c7
10	347a27-29	136.7-10	106.9-16		442c8-9
11	347b1-9	136.11-137.11	106.17-107.12		442c10-23
12	348b9-c18	137.12-141.8	107.13-110.28		442c24-443b15
13	348c18-348a7	141.9-143.9	110.29-112.22		443b16-c13
14	348a7-26	143.10-145.5	112.23-114.10		443c14-444a5
15	—	—	—	444a6-8	

(\*Ch.2はCh.1の再録なので略す. Tib.3はCh.3の重訳であり内容は一致するため略す.)

### 3. §2 漢訳付加説への反論

諸伝本間の明白な差異は、§0, 1, 2, 15の有無である<sup>2)</sup>。

金岡 [1957: 26–28] [1980: 100–103] は§1, 2を重視し、これらが「漢訳の附加」であって、『正論』を天部の所説でなく釈尊直説に変えて「本品教格の権威付け、神聖化」(金岡 [1980: 102])を図る、中国仏教独特の作為を示すものとした。

しかし、§1の後代付加は認められても、§2については疑問が残る。一般に *Ch.1* の属する伝承系統が最も原型に近いことが認められているし<sup>3)</sup>、§2が *Ch.1* 訳者曇無讖の加筆であれば、梵文原典からの訳出と考えられる *Tib2* に§2が存在する理由が説明できない。

加えて、金岡 [1980: 101] も「一カ所一寸疑問になる所」と指摘した§5の“kuladevate” (*Skt.* 132.12, *Tib1* 103.25) という呼びかけがある。金岡同所が参照した Nobel [1937: XLI] (XIIは誤植)は、“kuladevate”を錯誤とするものではなく、*Ch.1*, *Tib2*, *Ch.3*が釈尊の対告衆とする「地神堅牢」(sa'i lha mo brtan ma) が *Skt.*, *Tib1* で (Bodhisattvasamuccayā-) Kuladevatā (rigs kyi lha mo) に交代する現象について述べた箇所である。同じ現象は「蓮華喩讚品」(*Skt.* Ch.4) でより明示的に起きており、ノーベルによれば、この地神から Kuladevatā への交代は、*Ch.1* の属する伝承系統より後代の伝承系統で起こる現象である。

したがって、§2は漢訳の付加ではなく、*Ch.1* の原典から存在したと見るべきであろう。そして *Skt.*, *Tib1* の伝承系統では、§2, 5の対告衆が地神から Kuladevatā へと交代されたのち、§2のみ脱落したと見るのが妥当であろう。

### 4. 「正論」内容検討

「正論品」の本体は§6–14とした、力尊幢 (Balendraketu) 王が子の妙幢 (Ruciraketu) に語る梵天所説の「正論」(*Skt.* “Devendrasamayaṃ nāma rājasāstra,” *Tib* “rgyal po'i bstan bcos lha'i dbang po'i dam tshig,” *Ch.1* 「治世正論」, *Ch.3* 「王法世論名天主教法」) である。金岡説の「帝王神権説というパラモンの国王観」「善因善果的な観念」の並存という分析は、王位の由来を示す§8によっている<sup>4)</sup>。金岡説は、今生の王位を前生の「善因善果」の果と捉えることは「菩薩行の徳果大用を具体的な面で捉えるもの」であり、ゆえに今生でも「王たるものの義務は菩薩の精神に合わせねばならぬという行動規範が生まれ」という。しかしこの解釈には疑問が残る。

具体的な治国論は続く§9から始まるが、その第15–16偈に次の文言が見える。

vipākaphaladarāsī ca devai rāja-m-adhiṣṭitah //  
 sukr̥taduṣkṛtānām hi karmānām dṛṣṭadhārmikah /  
 vipākaphaladarāsanārtham devai rāja-m-adhiṣṭitah //<sup>5)</sup>

(異熟の果を顕示する者であるから、諸天より王は加護を受ける。なんとすれば善業と悪業の異熟の果を顕示するために、王は現世に属しながら諸天より加護を受ける。)

類似の文言は、非法の王の被る災いの記述を締め括る§13の第55偈にも出る。

sukr̥taduṣkṛtānām ca karmānām yaḥ pṛthagvidhah /  
 vipākaphaladarāsanārtham kartā rājā hi procyate //

(善業と悪業の異熟の果を顕示するために種々の行為をする人こそが、王と呼ばれる)

ここで言われているのは、善因楽果・悪因苦果の理を、現世において実現するのが王の仕事だということにほかならない。この間の§10-12では、王が被る神々の不興、それにより国土が被る種々の災いを詳述するのであるが、いずれも“yadā hy upekṣate rājā duṣkṛtām viṣaye sthitam” (王が領土に起きた悪事を見逃すとき)を語り出しとする。要するに、王は悪因苦果の理に従って、悪事には罰を与えねばならず、それに背けば災いを被るのである。

では「法」とは何か。山崎 [1994: 90-98] は、主にパーリ文ジャータカから「理法ダルマ (dharma, dhamma)」の概念を抽出している。この「理法ダルマ」は「万人の幸福と繁栄」をもたらすものであり、この法に基づく社会秩序を維持すべき王には、「十種の如法行為」「十の王法」がいわれるという。逆に「非法」の王政とは、放恣な政治のせいで、国民が昼は税吏に、夜は盗賊に収奪されるような事態をいう<sup>6)</sup>。王は「差別心を持たず公平・無私・慈悲の心」を持ってこうした事態を防がねばならない。そしてまた山崎 [1994: 92] は「王の政治の如法・非法は自然界をも動かす」という観念も紹介している。「王の正法治国→日月星辰・天候の順調→地味の肥沃→国民の健康長寿／王の非法→日月星辰・天候の不順→地味の涸渇→国民の多病短命<sup>7)</sup>」というものである。

「正論品」の「法」はこの「理法ダルマ」とよく合致するのであって、これを引き継いだものと考えられる。また「正論品」の、王の非法と天災を関連付ける「天人相与説」(金岡 [1980: 105]) も、自然界を司る神々が介在するという発展が見られるものの、上記の観念の延長線上にあるものと考えられるのである。

そして「正論品」は、Nobel [1937: XLI] が元は別行本であった可能性をいうほど、他章から内容的に独立した章である。他章の内容と会通して「法」に「菩薩の精神」の意味を読み込むのは、難しいと言わざるをえない。

## 5. 『宝行王正論』との比較

上記を補足するために、菩薩の精神に基づく正法治国を明示する『宝行王正論』を参照したい。

『宝行王正論』<sup>8)</sup>は冒頭(1章3-4偈)で、法(dharma)を繁榮(abhyudaya)の法と至福(naiḥśreyasa)の法に分ける。繁榮の法は、善業を行えば生天の果報があり、不善を行えば三悪趣に生ずるというものである(1章7-24偈)。至福の法は、有見・無見を離れて如実知を得れば解脱・涅槃に至るというものである(1章25, 43-45, 57偈)。王には法による政治が勧められるが(2章28-29偈)、これは繁榮の法であり、十善業道(1章8-9偈)と四摂事(2章33偈)を基調とする。個人としての行動が戒められ(2章33-71偈)、社会的施策としては造像・造寺、法師や尊像への供養、経巻書写の支援、また社会福祉施設や厚生施設の設置、減税等が勧められる(3章32-75偈)。その一環に盗賊の鎮圧(3章54偈)が言われ、利他のためには不善も行わねばならない(3章64偈)ともいう。一方、罪人への減刑・釈放等の寛刑主義も説く(4章30-37偈)。いずれも布施、利行に基づくものである。

王には菩薩たることが求められるから(ex. 第5章65-85偈)、究極的には菩提を目指すべきであり、繁榮の法は至福の法に統合されることになる(ex. 第2章73-74偈)。しかし現世の王である限りは、十善業道・四摂事に基づく政治を行うことが求められるのである。この観点から従来の「理法ダルマ」を「繁榮の法」と読み替え、「至福の法」に統合する点に、菩薩行としての正法治国論の独自性があるといえよう。

金岡説にいう「菩薩行の精神」に基づく正法治国論とはまさしくこうしたモデルを指すと思われる。しかし「正論品」には「至福の法」に該当する概念は見えず、「理法ダルマ」を菩薩行として昇華する意図は読み取り難い。

## 6. 結論

「正論品」に「帝王神権説というバラモンの国王観」と「善因善果的な観念」が並存するという金岡説の大枠は承認されるだろう。これらの統合において後者がより優位の観念とされたことも認められる<sup>9)</sup>。しかし、王の生まれについての「善因善果」を拡大解釈し、「法」を『宝行王正論』のような菩薩の法と理解するのは、難しい。「正論品」における正法治国とは、善因楽果・悪因苦果の理に則った信賞必罰的なあり方であり、その「法」とは従来の「理法ダルマ」を引き

継いだものと見るのが妥当である。「正論品」ではとくに「非法」が横行する際の、悪因苦果の理に則った必罰主義のみが強調されたものと理解される。

- 1) 金岡 [1980: 100–117] は金岡 [1957] の増補改訂版、同一部分もあるが併記する。  
 2) §0, 15の検討は別稿に譲るが、§15はCh.3の属する伝承系統(Recension, Skjærvø [2004 I: lv–lvii])のみの増広もしくはCh.3訳者義浄の加筆(日野 [2015] 参照)と考えられる。  
 3) Nobel [1937: XXIX–XXXII], Skjærvø [2004 I: lv–lvii].  
 4) 「帝王神権説というバラモンの国王観」の論拠は, *Skt.* 10–12偈, *Tib1* 10–12偈, *Ch1* 347a17–20, *Ch3* 442b23–28. 「善因善果的な観念」の論拠は, *Ch3* 442b21–22 (「由先善業力 生天得作王」), *Ch1* 347a15–16. ただし *Skt.*, *Tib1* 対応部分(第9偈)に「善業」に対応する語はない。  
 5) *Skt.* は Skjærvø [2004: I] を参照して適宜修正を加える, 以下同。  
 6) ジャータカ第520話, PTS ed. vol. V pp. 98ff.  
 7) ジャータカ第77話 (PTS ed. vol. I pp. 336–343), 194話 (vol. II p. 124), 276話 (vol. II p. 367), 334話 (vol. III pp. 110–112) に断片的に, *Aṅguttara-nikāya* 4.7.70 (PTS ed. vol. II pp. 74–75) にまとまった形で説かれる。  
 8) 『宝行王正論』梵文・蔵訳は Hahn [1982] を用い, 訳語は瓜生津 [1974] に倣う。  
 9) 正論品第49偈参照。

〈略号表〉

*Skt.* = Nobel [1937]

*Tib1* *Phags pa gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po shes bya ba theg pa chen po'i mdo.*

Tohoku No. 557, Otani No. 176.

*Tib2* Jinamitra, Śīlendrābodhi, Ye shes sde tr. (*Tib1* 同題). Tohoku No. 556, Otani No. 175.

*Tib3* Chos grub (法成) tr. *Phag pa gser 'od dam pa mchog tu nram par rgyal ba'i mdo sde'i rgyal po theg pa chen po'i mdo.* Tohoku No. 555, Otani No. 174.

*Ch.1* 曇無讖訳『金光明経』. T. No. 663, vol. 16.

*Ch.2* 寶貴合『合部金光明経』. T. No. 664, vol. 16.

*Ch.3* 義浄訳『金光明最勝王経』. T. No. 665, vol. 16.

〈参考文献〉

Hahn, Michael. 1982. *Nāgārjuna's Ratnāvalī*. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.

Nobel, Johannes. 1937. *Suvarṇabhāṣottamasūtra: Nach den Handschriften und mit Hilfe der Tibetischen und Chinesischen Übertragungen*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

———. 1944. *Suvarṇabhāṣottamasūtra: Die Tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch*. Leiden: E.J. Brill; Stuttgart: W. Kohlhammer.

Skjærvø, Prods Oktor. 2004. *This Most Excellent Shine of Gold, King of Kings of Sutras, the Khotanese Suvarṇabhāṣottamasūtra*. 2 Vols. Harvard University: Department of Near Eastern Languages and Civilizations.

瓜生津隆真 1974「宝行王正論」『大乘仏典第14巻龍樹論集』中央公論社。

金岡秀友 1957「金光明経の帝王観とそのシナ・日本の受容」『仏教史学』6(4): 21–32。

———. 1980『金光明経の研究』大東出版社。

日野慧運 2015「義浄訳『金光明最勝王経』について」『インド哲学仏教学研究』23: 39–56。

山崎元一 1994『古代インドの王権と宗教——王とバラモン——』刀水書房。

〈キーワード〉 金光明経, 正論品, 宝行王正論

(武蔵野大学講師, 博士(文学))